

(二〇一八年度)

5 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は20ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

—
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「語りえないことについては、沈黙しなければならない」。ウイトゲンシュタインは『論理哲学論考』の掉尾ちうびをこの簡勁かんけいな一句でもって締めくくった。それになぞらえるならば、私が以下の論述で展開し、擁護しようと思っているのは、「物語りえないものについては、沈黙せねばならない」というテーゼである。もちろん、話を叙事詩や小説などいわゆるフィクションの領域に限るならば、これは単なるトートロジーにすぎず、それこそ「語るに落ちる」話であろう。しかし、場面を過去の出来事や歴史的事実にまで広げるならば、これはいささか面妖めんようで背理はいりを孕はらんだテーゼとなるに違いない。というのも、光源氏が葵の上を妻に迎えたという出来事は、『源氏物語』という言語作品を離れては意味をなさないのに対し、源義経が静御前を妻に迎えたという出来事は、『平家物語』という作品の成立とは無関係に存在する歴史的事実だと考えられるからである。私がここで主張したのは、前者と同様に後者の出来事もまた、歴史を物語るという言語行為、すなわち「物語行為」を離れては意味をなさず、また存在しえないという、すまし返3った常識の温顔を少しばかり逆撫さかでしかねないテーゼである。常識の糸が織りなす平明な図柄は、裏を返せば、絡まり合った糸の間から思いもかけない奇怪な図柄を見せてくれる。そのもつれ合った糸を解きほぐすことが、さし当つての本章の課題にほかならない。

まずは、「物語る」という言語行為の特異性を見定めることから始めよう。もちろん、「物語る」は「語る」という動詞から来ているが、それと似ていて非なる動詞に「話す」がある。そして、「語る」と「話す」とはどちらも人間の最も基本的な言語活動をあらわす言葉でありながら、その含蓄は微妙な差異を見せている。例えば、「話し合い」は日常茶飯に行われるのに対し、「語り合い」はあつたとしても稀まれであろう。また、「話が合わない」ことはあつても、「語りが合わない」という言い方は見当たらない。さらに、「話の接ぎ穂」を見いだすのに苦勞4をしても、「語りの接ぎ穂」を見いだすことはそもそも意味をなさないのである。むしろ、「語り」が遂行される場面では、それが他の語りと「合う」ことや、「合わない」ことは問題とはならず、「合の手」が入ることはあつても、はなから「接ぎ穂」は不要なのである。

以上のことからすれば、「話す」が話し手と聞き手の役割が自在に交換可能な「双方向的」な言語行為であるのに対し、「語る」は語り手と聴き手の役割がある程度固定的な「単方向的」な言語行為と言えそうである。視点を変えれば、「話す」がその都度の場面に拘束された「状況依存的」で「出来事的」な言語行為であるのに比べ、「語る」の方ははるかに、「状況独立的」であり、「構造的」な言語行為だと言うことができる。このことは、語源的に「話す」が「放つ」に由来し、「語る」が「象かた」に由来するという事実からも、一つの傍証が得られるであろう。国文学者の西郷信綱はこの語源的考察を踏まえながら、両者の違いを端的に次のような形で際立たせている。

ではハナシとは何か。それは、やはり玉勝間にハナシは放しかといい、また俚言集覽にハナシというも、もとは放の義なりとしているのに従つてよからう。つまり、言葉を口から自由に出して雑談するのがハナシであった。だから囃に乗りすぎるとそれは「放言」になり、ハナシ半分に聞いておくということになりかねない。うまいハナシとか、まアハナシだがなどといういいかたにも、ハナシのもつ自由さ、気楽さがうかがえる。

そして倭訓栞や大言海などが、カタルを型・象と関係づけているのは、たぶんの中していると思う。カタリは始まりと終りのある、方式のととのつたものいいで、カタリ部とかカタリゴトとかいう神話的・祭式的なカタリが一方の極には存在した。もっと日常語に近かつたはずだが、昔話も一定の形式をもつカタリであった。そしてハナシよりカタリの方が形式性に富んでいたのは確実である。

ここに挙げられている「話し」の自由性と「語り」の形式性というコントラストは、「話す」という行為が特定の場面における対話の相手の反応や応答に応じて言葉を臨機応変に繰り出すという一種の相互行為であり、話がどこに落ち着くかは成行きまかせという面があるのに対し、「語る」という行為は聴き手の反応や応答とは独立に、その落ち着き先はあらかじめ語りの構造と

仕掛けによって定められている、という違いに起因している。それゆえ、「話す」には語や文を X に、悪く言えば場当りの口に出すといった意味合いが強いのに対し、「語る」の方は、一定の筋あるいは起承転結の Y をもった言説を述べるという色彩が濃くなっている。

この違いは、他の外国語においても同じように確認することができる。日本語の「話す」と「語る」の差異に対応するのは、英語で言えば、sayとtellの違いであろう。後者がtale(物語)と語源的に近いことからわかるように、tell a storyとは言っても、say a storyという言い方はできない。同様に、ドイツ語においても、ein Märchen erzählenとは言っても、その動詞をsagenで置き換えることはできない。要するに、筋やプロットをもった物語やメルヘンは、「語る」ものであって、「話す」ものではないのである。それゆえ、「語られざる秘話」はあっても、「話されざる秘話」は存在しない。いささか逆説めくが、「秘話」や「逸話」、あるいは「お伽話」や「昔話」など、名詞化され筋立てによって構造化された「話」は、「話す」にはいささか荷がちすぎ、その任を「語る」ことに委ねざるをえないのである。いわば、「話す」という行為は、日常生活の現場に密着しすぎており、その重力圏を離脱して想像や虚構の天空に飛翔ひしやうすることができないのだと言えよう。この点について、坂部恵は『かたり』の中で、ささきの西郷の分析と平行的に、両者の基本的相違を以下のように特徴づけている。

さらに考えてみると、両者のあいだには、あきらかにいわば発話行為のレベルの差といったものがみとめられる。一言でいって、この二つの言語行為をくらべた場合、(はなし)のほうが、より素朴、直接的であり、それに対して、(かたり)のほうが、より統合、反省、屈折の度合が高く、また、日常生活の行為の場面からの隔絶、遮断の度合が高い。

もちろん、「話す」と「語る」を言語行為という側面から見た場合、それらを「約束する」、「警告する」、「宣誓する」といった典型的な行為遂行的発言(performatives)と比較してみれば、「話す」と「語る」の間には、差異よりはむしろ共通性の方が際立つことであろう。しかし、坂部が指摘する両者の間の「発話行為のレベルの差」を見逃すわけにはいかない。後にみるように、こ

のレベルの差こそが、われわれの歴史意識の形成に深く関わるものだからである。さらに坂部は、この差異を敷衍して、「語る」という行為を「すでに、意識の屈折をはらみ、誤り、隠蔽、欺瞞ぎまんさらには自己欺瞞にさえ通じる可能性をそのうちにはらんだ、複雑で、また意識的な統合の度合の高い、ひとレベル上の言語行為」として捉え返している。すなわち、「話す」が直接的に他者に働きかけるという意味で、まぎれもなく行為遂行性を身に帯びているとすれば、「語る」の場合には他者への働きかけが間接的になる分だけ、行為遂行性は屈折あるいは遮蔽され、メタ・レベルに押し上げられていると言うべきなのである。

(野家啓一「物語の哲学―柳田國男と歴史の発見」より)

〔注〕ウイトゲンシュタイン：(一八八九年―一九五一年)オーストリア生まれの哲学者 トートロジ：同語反復 西郷信

綱：(一九一六年―二〇〇八年)日本生まれの国文学者 玉勝間：江戸時代の随筆。国学者本居宣長の作 俚言集覽：

江戸時代の国語辞書 倭訓栞：江戸時代の国語辞書 大言海：昭和時代の国語辞書 坂部恵：さかべめぐみ(一九

三六年―二〇〇九年)日本生まれの哲学者 メタ・レベル：一段階上のレベル

問一 傍線部1はここではどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 結末のおもしろくないことを語ることになるであろう。
- b 言う必要のないことを言うことになるであろう。
- c 言いたくないことまで話すことを余儀なくされるであろう。
- d 語るのも恥ずかしいことをすることになるであろう。

問一 傍線部2のように言いうるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 歴史的事実は歴史家によってすでに語られており、誰かに物語として語り直されるまでもないから。
- b 過去の事実は誰かに物語として語られるまでもなく存在していると一般に考えられているから。
- c 歴史というものも叙事詩や小説と同じフィクションだという考えは、奇抜で常識に反するから。
- d まだ解明されていない過去の出来事があるからといって、歴史が存在しないということにはならないから。

問三 傍線部3はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 常識をわきまえていて奇抜な言動を嫌う温厚な人物に恥しい思いをさせるような論題。
- b 誰もが安心して信じている穩当な考えに異を唱えて人々を不快にするような言明。
- c 常識とされていることの裏面には思いもよらない真実があることを人々に気づかせて不安にするような命題。
- d 誰もが認める正統性のある見解に敢えて挑戦して人々を呆れさせるような主張。

問四 傍線部4はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 話し始めるきっかけを苦労して見出しても、語ることにってはまったく役に立たないだろう。
- b 人の話に合わせるために努力することには意味があるが、人の語りに合わせることはもともと不可能なので意味がないだろう。
- c 会話を活性化する気の利いた言葉を見つけることは難しく、物語を活性化する気の利いた言葉を見出すことはそもそも不可能だろう。
- d 話が途切れれば人々はなんとか話を続けるきっかけを探そうとするが、語りの場合はその必要性がもともとないだろう。

問五 傍線部5はどうか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 物語の進行と結末が聴き手の反応に左右されず、語り手によって前もって設定された構成によって決定される言語行為。

b 物語の展開が状況に左右されず、物語に内在する論理そのものによって筋がおのずから構成されていく言語行為。

c 物語固有の始まり、展開、終わりそれぞれの形式が整っており、語り手と聴き手の相互作用に左右されない言語行為。

d 神話的・祭祀的な形式に由来する特定の構成をもち、語り手と聴き手の役割がある程度固定した言語行為。

問六 傍線部6はどうか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 「話す」の語源が「放つ」であり、「語る」の語源が「象る」であることは、以上のことを間接的に証明するだろう。

b 語源的に見れば「話す」は「放つ」と、「語る」は「象る」と同系であることが、以上のことを証明する究極的な根拠になるだろう。

c 語源をさかのぼれば「話す」は「放つ」であり、「語る」は「象る」であるが、これは以上のことを比喩的に説明するだろう。

d 以上のことは、語源的に「話す」が「放つ」に、「語る」が「象る」に由来することを裏付けていると言えるだろう。

問七 空欄X、空欄Yに入れるのにもっとも適切な語句の組み合わせを、次の中から一つ選べ。

- a X…縦横無尽、Y…形式
- b X…自由奔放、Y…作法
- c X…当意即妙、Y…結構
- d X…天真爛漫、Y…展開

問八 傍線部7はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 秘話のような貴重なものを表現する手段としては、日常生活に密着した「話す」ことではなく、日常生活からの飛翔が可能な「語る」ことこそふさわしい。

b 物語として成立している「秘話」は「語られない」から「秘話」なのだが、日常的な会話の現場では常に話題になる。

c 「話すこと」は言葉の相互的なやりとりによって成立するので、「語られる」ことがなくても物語として成立している。「秘話」と違って、「話される」ことがなければ存在しえない。

d 物語は「話される」ものではなく「語られる」ものなので、「話されない物語」としての「秘話」は存在せず、「語られない物語」としての「秘話」しか存在しえない。

問九 傍線部8はどうか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 「話す」ことも「語る」ことも発話によって何かを伝えることであり、そもそも「約束する」ということを成立させる基礎となるという共通性がある。
- b 「話す」ことも「語る」ことも基本的に口頭で何かを伝えることだという点で共通性を持ち、「約束する」ことが口頭でも文書でも可能であるのと異なる。
- c 「約束する」には、「約束する」と言うことによって「約束」という行為を遂行する性質があるが、それがない点で「話す」と「語る」には共通性がある。
- d 「約束」をすればそれを守る義務が発生するという意味で「約束する」には倫理的側面があるが、それがない点で「話す」と「語る」には共通性がある。

問十 次のの中から本文の内容に合致するものを一つ選べ。

- a 「話す」ことと「語る」こととはいずれも言語行為であるという点で似ているが、その実際の使われ方には決定的な差異がある。
- b 創作された文芸作品と同様に歴史も物語られることによってはじめて存在するのだから、客観的な歴史的事実は存在しない。
- c 「語る」ことが「話す」ことよりも複雑で間接的であるというレベルの差は、人間の歴史意識の形成に関係をもつ。
- d 「話す」ことと「語る」こととの差異を明らかにする際には、その語源の解明やそれらに相当する外国語の語句の解明などが不可欠である。

二

次の文章は正徹の著した『なぐさみ草』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

いにし三月の末とかよ、根に帰り古巢を急ぐ花鳥の身さへ、あととどむべきかたなくなりぬれば、誘ふ水のはれむよすがにまかせつつ、都をさすらひ出でて、関のこなたまで迷ひ来しかな。

もとより、かかる世捨て人は、いつかはこと定むべき宿もあらましを、墨の衣のあさはかに、ただ夷の姿にあらざるばかりにて、蝙蝠の鳥にも鼠にもあらぬがごとくにして、あるいは、玉の砌の尊きにのぞみ、あるいは、民屋の賤しきにいたりつつ、世のことわざに従ひきぬれば、四十年のなみ、身にかかるまで、都のうちを去らぬことになりぬるなるべし。

しかあれば、よもの国の境遠き里には、知れるたづきもなくして、行く末心細しともいひぬべし。関の岩門今日ぞ踏みならし侍る。

(I) 心こそあとに引かるれ旅人の駒だになづむ関の岩門

志賀の浦わにうち出でて見れば、比叡の大嶽、長等の山、ただこの麓の霞につづきて、そこはかとなく煙りわたれる、よもの木の芽の春の嵐より雪と散りくる花も、春を誘ひ顔に波の上に散り敷きたる、まことに漕ぎ行く舟の跡見ゆるばかりなり。

(II) 山風も桜はよきよ鳩の海に春行く波の花はありとも

守山などいふ所は、いたく心もとどまらず。森の陰の一村里にて、市女、商人の物騒がしきのみなり。時雨もいたくなどおほゆるも、今は時ならずや。

(III) 君が世に身こそめぬれ守山の下葉のこらぬ春の恵みを

今宵は鏡山の近く宿りとりぬ。ならばぬ旅とにや、思ふかたの夢だにもなし。

(IV) 鏡山春の旅寝の有明に月も老いぬる影や霞まむ

〔注〕志賀の浦わ：近江国の歌枕。滋賀県大津市及び滋賀郡の琵琶湖西南岸。比叡の大嶽：京都市と大津市にまたがる比叡

山。延暦寺がある。長等の山：近江国の歌枕。滋賀県大津市。三井寺がある。鳩の海：近江国の歌枕。琵琶湖の

別称。守山：近江国の歌枕。滋賀県守山市。鏡山：近江国の歌枕。滋賀県蒲生郡竜王町と野洲市にまたがる雨乞

岳竜王山。

問一 傍線部1「根に帰り古巢を急ぐ花鳥の身さへ、あととどむべきかたなくなりぬれば」は、崇徳院の「花は根に鳥は古巢に帰るなり春のとまりを知る人ぞなき」〔千載和歌集〕を踏まえた表現である。傍線部1の解釈として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 春になると、花が散り、鳥が飛び去るように、私も旅に出たいと思う気持ちが強くなってきて。

b 春が終わると、花が散り、鳥が飛び去ってしまう、私も旅に出る気力も衰えたけれど。

c 春が終わると、花が散り、鳥が飛び去るように、私も都に住み続ける意欲が衰えてしまつて。

d 春になると、花が散り、鳥が飛び去ってしまう、私も何をやる気力もなくなつたけれど。

問二 傍線部2「誘ふ水のあはれむすがにまかせつつ」は、小野小町の「わびぬれば身を浮き草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」〔古今和歌集〕を踏まえた表現である。傍線部2の解釈として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 地方で一緒に住もうと誘ってくれる人がいることを期待して。

b たまたま一緒に旅をしようと思つてくれるような人などいないので。

c 旅をたのしもうという思い付きを得たのを良い機会として。

d 都にいても面白くないことが続いたのを良い機会として。

問三 傍線部3「いつかはこと定むべき宿もあらましを」の解釈として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 旅に出たらいつかここに泊まってみたい、と思うような宿があればいいのだが。
- b 旅に出ても、いつここに泊まったことがあつたかと思うような定宿はないので。
- c いつまでたつてもここに定住したいというような日が来るとも思われないので。
- d いつここに住むか、というような家に対する将来計画は立てない方がいいので。

問四 傍線部4「蝙蝠の鳥にも鼠にもあらぬがごとくにして」とあるが、どのような身分をいうか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 鳥でも鼠でもない蝙蝠こうもりのように、墨染めの衣を着ている僧侶。
- b 鳥でも鼠でもない蝙蝠のように、粗野な東国の武士。
- c 鳥でも鼠でもない蝙蝠のように、身分が高いか低いか中途半端な身分。
- d 鳥でも鼠でもない蝙蝠のように、僧侶か俗人か中途半端な身分。

問五 傍線部5「世のことわざに従ひきぬれば」の解釈として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 世間で流行している諺に生きる方法を学びながら。
- b 生きるための知恵を世事の観察から得たりして。
- c 世間の雑事雑用に来る日も来る日も追われながら。
- d 世の中を動かすような有益な仕事をしていたので。

問六 Iの歌は、その直前の波線部「関の岩門今日ぞ踏みならし」とともに、大武高遠の「逢坂の関の岩門踏みならし山立ち出づる桐原の駒」(『拾遺和歌集』)を踏まえている。Iの歌の解釈として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 逢坂の関では、旅人の乗った馬でさえ越えるのが難儀という。私が後方の都に心引かれるのももっともなことだ。
- b 逢坂の関では、旅人の乗った馬でさえ越えるのが難儀という。旅人が早くも旅先に心引かれるのはもっともなことだ。
- c 逢坂の関では、旅人の乗った馬でさえ上京する感慨を覚えたという。旅人が旅情に涙するのはもっともなことだ。
- d 逢坂の関では、旅人の乗った馬でさえ上京する感慨を覚えたという。私が後ろ髪を引かれるのももっともなことだ。

問七 傍線部6「よもの木の芽の春の嵐より雪と散りくる花も」には和歌の修辭が用いられている。その説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「よもの木の芽の春の」は「嵐」を導く序詞となっている。
- b 「春」は「芽の」張る」と掛詞である。
- c 「木の芽の春」には擬人法が用いられている。
- d 「よもの木の芽の春の嵐」には「の」が四つも連続し、倒置法となっている。

問八 傍線部7「春を誘ひ顔に波の上に散り敷きたる」の解釈として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 春が去るのを誘うように、琵琶湖の湖面は桜の花びらで一面に敷き詰められた。
- b 春が来るのを誘うように、琵琶湖の湖面に桜の花びらのような白い波が立った。
- c 春には人を誘うように、琵琶湖の湖面に白波が立ち、桜が次々に散っていった。
- d 春の女神を琵琶湖の湖面に誘い出すように、桜の花が白波の立つように咲いた。

問九 IIの歌は、その直前の波線部「漕ぎ行く舟の跡見ゆる」とともに、宮内卿の「花誘ふ比良の山風吹きにけり漕ぎ行く舟の跡見ゆるまで」〔『新古今和歌集』〕を踏まえている。IIの歌の解釈として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 山風も桜花は避けて吹いてくれ。たとえ晩春の琵琶湖を行く舟が、花のように美しい白波を立てたとしても、花が散るのは見たくないから。

b 山風も桜花は避けて吹いてくれ。たとえ晩春の琵琶湖を行く舟が、花のように美しい白波を立てたとしても、山に咲く花の方がより美しいから。

c 山風も桜花を吹きおろしてくれ。たとえ晩春の琵琶湖を行く舟が、花のように美しい白波を立てたとしても、花が散る方がより美しいから。

d 山風も桜花を吹きおろしてくれ。たとえ晩春の琵琶湖を行く舟が、花のように美しい白波を立てたとしても、白波ははかなく消えてしまうから。

問十 IIIの歌は、その直前の波線部「時雨もいたく」とともに、紀貫之の「白露も時雨もいたく守山は下葉残らず色づきにけり」〔『古今和歌集』〕を踏まえている。IIIの歌の解釈として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 春の恵みは下葉までも残すことなく行き届くが、天皇は誰にでも恩恵を施すわけではないのに、私だけがいただきた。

b 春の恵みは下葉までも残すことなく行き届くが、天皇は誰にでも恩恵を施すわけではないので、私もいただかなかつた。

c 春の恵みが下葉までも残すことなく行き届くように、天皇は誰にでも恩恵を施したので、私もいただいた。

d 春の恵みが下葉までも残すことなく行き届くように、天皇は誰にでも恩恵を施したのに、私だけがいただかなかつた。

問十一 IVの歌は、その直前の波線部「思ふかたの夢だにもなし」とともに、藤原定家の「袖に吹けさぞな旅寝の夢も見し思ふ方より通ふ浦風」(『新古今和歌集』)を踏まえている。IVの歌の解釈として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 春の鏡山に旅寝をしても、有明の月は老いることなく、光が霞むなどということなどあるはずがない。
- b 春の鏡山に旅寝をすると、有明の月までも老いたのか、光が霞んでしまつてよく見えなかった。
- c 春の鏡山に旅寝をすると、有明の月までも老いたのか、光が霞んで見えたりなどはしなかった。
- d 春の鏡山に旅寝をしても、有明の月は老いることなく、光が霞まないということなどあるはずがない。

問十二 『千載和歌集』『古今和歌集』『拾遺和歌集』『新古今和歌集』について、正しくない説明をしているものを、次の中から一つ選べ。

- a 『千載和歌集』は、源平の争乱によって乱れた世を文化の復活によって回復すべく、崇徳院によって勅撰された。
- b 『古今和歌集』は、紀貫之らが撰者となり、小野小町ら六歌仙の時代の古歌も多く採録された。
- c 『拾遺和歌集』は、『古今和歌集』『後撰和歌集』とともに、三代集として古典の扱いを受けた。
- d 『新古今和歌集』は、藤原定家らが撰者となり、宮内卿らの女流歌人の新風和歌も多く採録された。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

先生^ハ常州水戸^ノ産也。其伯疾^{ヤミ}、其^ノ X 天^{ヨウス}。先生夙夜^{シユクヤ}陪^シ膝^ニ下^ニ、

戰戰兢兢^{タリ}。其^ノ為^リ人^ト也、不^レ滯^ラ物^ニ、不^レ著^セ事^ニ。尊^ニ神^ニ儒^ニ而駁^シ神^ニ儒^ニ、

崇^ニ仏^ニ老^ニ而排^シ仏^ニ老^ニ。常^ニ喜^ビ賓^ニ客^ヲ、殆^ト市^ト于^ニ門^ニ。每^ニ有^レ暇^ニ、読^ム書^ヲ、不^レ求^メ必^ズ解^ス。

歛⁴不^レ歛⁴歛⁴、憂⁴不^レ憂⁴憂⁴。月⁴之⁴夕⁴、花⁴之⁴ Y 斟^{クンデ}酒^ヲ、適^{カナヒ}意^ニ、吟^{ジテ}詩^ヲ、放^ツ情^ヲ。

声⁴色⁴飲⁴食⁴、不^レ好^マ其^ノ美^ナ。第^{タク}宅^ニ器^ヲ物^ヲ、不^レ要^セ其^ノ奇^ナ。有^レ則^レ隨^ヒ有^レ而樂^シ胥^シ、

無^{ケレバ}則^チ任^{セテ}無^{キニ}而晏^{タリ}如^ク。自^リ蚤^{ハヤク}有^レ志^ヲ于^ニ編^ニ史^ニ、然^{レドモ}罕^{ナリ}二書^ノ可^キレ^ス。爰^ニ搜^{サグリ}爰^ニ購^ヒ、

求^メ之^ヲ得^{タリ}之^ヲ。微^{オシク}遴^ス以^テ稗^ハ官^カ小^カ説^ヲ、撫^{ヒロヒ}実^カ闕^レ疑^ヲ、正^シ閏^シ皇^ノ統^ヲ、是^レ非^シ人^ノ臣^ト、

輯^{あつ}成^メ二家^ノ之^ノ言^ヲ。元^ノ禄^ノ庚^ノ午^ノ之^ノ冬^ノ、累^シ乞^ヒ骸^ノ骨^ヲ致^ス仕^ス。初^メ養^ヒ二兄^ノ之^ノ子^ヲ為^シレ

嗣^ト、遂^ニ立^テ之^ヲ以^テ襲^レ封^ヲ。先生^ノ之^ノ宿^ノ志^ヲ、於^ニ是^ニ乎^ニ足^ル矣[。]

(徳川光圀「梅里先生碑陰」)

〔注〕○先生―徳川光圀を指す。光圀は第三子であったが、水戸藩主の地位を継いだ。○夙夜―朝から晩まで。○陪膝

下―父母の側におかれて。○神儒―神道と儒教。○仏老―仏教と道教。○楽膏―楽しむ。「膏」は、語調を調

えるために添えられた助字。○遴―選択する。○稗官小説―世間に伝わる物語や伝説の類。○正閏―正統な

ものと正統でないものとを区別し、明らかにする。○元禄庚午―元禄三年(一六九〇)。○乞骸骨―辞職を願ひ出

る。

問一 「先生」の兄弟の順位は三番目である。この場合、文中の空欄 X に入れるべきもつとも適切なものを次の中から一

つ選べ。

- a 舅
- b 叔
- c 婿
- d 季
- e 仲

問二 文中の空欄 Y に補充する語として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 昼
- b 暮
- c 宵
- d 朝

問三 傍線部 I 「戦戦兢兢」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 病気になるらないよう節制した
- b 叱られないよう怖れ慎んだ
- c 無礼にならないよう身を慎んだ
- d 危険をさけてびくびくした

問四 傍線部2「尊神儒而駁神儒、崇仏老而排仏老」の説明として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 神道や儒教、仏教や道教を信仰すると同時に、その批判も行うということ。
- b 神道や儒教、仏教や道教は敬うべきであって、批判してはならないということ。
- c 神道や儒教、仏教や道教は民間の教えであり、批判の対象となるということ。
- d 神道や儒教、仏教や道教を尊重しはするが、それを無批判に受け入れることはしないということ。

問五 傍線部3「市于門」の意味として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 人を訪ねる
- b 商売人が来る
- c 多く集まる
- d 家が栄える

問六 傍線部4「歎不歎歎、憂不憂憂」についての説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 「歎べども歎を歎とせず、憂ふれども憂を憂とせず」と訓読し、嬉しいことがあってもそれを嬉しいとは思わず、気に病むことがあってもそれを気に病まないという意味を表す。

b 「歎は歎たらざれば歎、憂は憂たらざれば憂」と訓読し、喜びは喜びではないと認識した時に真の喜びとなり、悩みは悩みではないと認識した時に真の悩みとなるという意味を表す。

c 「歎びて歎歎たらず、憂へて憂憂たらず」と訓読し、楽しんでも楽しみはきわめず、心を悩ませても深刻にならないという意味を表す。

d 「歎べば歎ばずして歎び、憂へば憂へずして憂ふ」と訓読し、喜ぶ時には喜ぼうと思わずして自然と喜び、心配する時は心配しようと思わずして自然と心配するという意味を表す。

問七 傍線部5「編史」に該当する著作として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 本朝通鑑 b 神皇正統記 c 大日本史 d 日本外史 e 読史余論

問八 傍線部6「於是乎足矣」と先生が考えた理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 喜怒哀楽に左右されない、自分らしい生涯が送れたから。

b 何事においても過不足のない生き方ができたから。

c 歴史書を編集して、独自の見解を世に打ち出すことができたから。

d 兄の子供に家督を譲ることができたから。

問九 この文章について述べた評として、ふさわしくないものを、次の中から一つ選べ。

- a 対句を多用した文章となっている。
- b 筆者が自己の信条を誠実に述べた文章である。
- c 自己の姿を客観視して書いた文章である。
- d 陶淵明の「五柳先生伝」の影響をうけている。
- e 白居易の「醉吟先生伝」の影響をうけている。
- f 墓石に彫りつけるための文章である。